青嶺 seirei

文責　田中泰司

伊万里市立青嶺中学校

全てを出し切れ 三年生＋１！

本日から二日間、県立高校の一般入試が行われています。第一志望の学校に合格するべく、今まさにこの瞬間、死力を尽くしていることでしょう。

誰もが自分の希望する道を歩いていきたいと考えますが、高校は義務教育ではなく「定員」があり、その枠内での入学しか許可されません。

進路を選択するにあたり、十分に考えそして選択したはずです。その思いの強さが、辛い勉強を続ける原動力になったはずです。

この二日間を自分の努力を信じ、思いをぶつけて最後の最後まで、粘り強く頑張ってほしい。そして、全てを出し尽くしてほしいと願っています。

青嶺中学校職員全員で受験した全員の健闘を祈っています。

遅れたときは…？

会社員時代、埼玉の春日部から東京の秋葉原まで電車通勤しており、住んでいたアパートから会社まで片道一時間三十分以上かけて通っていました。

私が使っていた路線は、霧が発生して電車が遅れることがよくありました。

鉄道会社は、そんなときには「遅延証明書」を発行してくれます。それを見せれば勤務開始時刻に遅れても遅刻にはならないのでした。

ある日、やはり霧が出て、電車が遅れました。私は、証明書をもらって、特に急ぐことはなく遅れて会社につき、証明書を提出しました。

すると、上司から「理由はわかったが、前日の天気予報で霧がでて遅れる可能性はわかっていたはずだ。なぜ早めの電車で来ようとしなかったのか？そして遅れてきたならもっと急いでくるべきだ。必死に来ようとする姿を見せることが、他のメンバーへのせめてもの礼儀だ。」と注意を受けました。

その時は「俺のせいじゃないし。そんなのしょうがないやん…」と素直に聞けませんでした。

しかし、一度だけならまだしも毎回遅刻を天候や交通状況のせいにして、遅れたことを正当化していたら、周囲からそういう評価を受けますし、急がない姿を見せると、周囲を嫌な気持にさせ、信用もされなくなります。

天候が良くない日は少し時間に余裕をもって早めに出る、遅れそうでも、遅れていても、ゆっくりではなく急ぐ姿勢を見せる。それは周囲に対する気遣いであることを上司から学びました。それからほんの少し、行動を変えようと意識したように覚えています。皆さんはどう思いますか？遅れたとき、遅れそうなとき、どういう行動を取っていますか？

フライングドクター

広大なオーストラリア大陸では町から町までの距離が離れており、急病人やけが人が出たときに搬送が間に合わず、命が危険にさらされてしまいます。

そこで、無線で連絡を受けるとセスナ機で医師が現地まで飛び、病人やけが人を手当てし飛行機で搬送する「フライングドクター」という制度が誕生しました。費用は国が負担し、数多くの人命が救われたそうです。

エアーズロックからキングスキャニオンまでの砂漠地帯を途中で知り合った仲間と4台のバイクで向かっていた時のことです。

未舗装路で砂埃が激しく距離を取りながら進んでいましたが、突然前を走っていたバイクが転倒し運転していた仲間は地面にたたきつけられました。時速百km近くは出ていたため、ハンドルは無残に折れ曲がり、ライダーは全く動きませんでした。他のバイクは先行しており、転倒に気付いたのは最後尾を走っていた私だけでした。

私はすぐにバイクを停めて、まずはケガ人を路肩近くに動かし、バイクを移動させ、散らばった荷物を拾い集めました。それまで二時間近く走ってきて対向車とはほとんどすれ違わなかったので、助けをどう呼ぶべきか迷いましたが、幸運なことにしばらくすると地元の青年がピックアップトラックで通りかかりました。

事情を説明し、様子を見て彼はフライングドクターを呼んだ方がいいと判断し、車の無線で着陸可能な一番近くのロードハウスの位置を本部に知らせてくれました。そして自分の車の後部座席にけが人を乗せ、バイクは荷台に二人で載せて一緒にロードハウスまで向かいました。

外傷は幸いほとんどなかったのですが、頭を強く打った可能性があり、横になって休んでいます。ロードハウスの家族は大変親切にしてくれ、しばらくして広場に着陸したセスナに乗ってアリススプリングスの病院に運ばれて行きました。制度としては知っていたものの、自分たちがその世話になるなんて思いもしませんでしたが、迅速に判断し行動してくれた青年に本当に感謝です。

幸い大きなけががなく脳波にも異常が見られなかったのでほどなく退院、エアーズロックのキャンプ場までバスで戻ってきました。

後日ロードハウスまでバイクを受け取りに行き、お礼にビールを1ケース届けました。その人は旅を続け、大陸一周を達成し帰国後この出来事を「BACKOFF」というバイク雑誌に体験談として寄稿したり、「山と渓谷」誌のライターをしたりして、今は奄美大島にいると聞いています。マイトシップと、フライングドクター制度の必要性とありがたさ、そして何よりも人の温かさをしみじみと感じた出来事です。

校長室より

三月に入り、毎日が飛ぶように過ぎていきます。今は受験生としての三年生を応援していますが、受験が終われば卒業生として、金曜日には晴れの舞台が待っています。

私が初めてこの青嶺中学校にきてもうすぐ一年、多くの思い出を共有し、感動をもらい、初めて送り出す卒業生たちです。

「時がもう少し、ゆっくりと過ぎてくれないだろうか」名残惜しさに、ついそんなわがままを考えてしまう今日この頃です。